



# みどり

令和5年度  
練馬区立大泉学園緑小学校  
校長 鈴木 英明  
令和 6年 3月 15日

## 令和5年度 学校評価結果のお知らせ

日頃より本校の教育活動にご理解、ご協力いただきありがとうございます。本校では、皆様の信頼に応えるべく、よりよい教育活動を目指して毎年、教育課程等の改善、充実を図るための学校評価を実施しています。保護者の皆様には、アンケートにご協力いただいたこと、感謝いたします。(データ回収率は66%でした)。誠にありがとうございました。アンケート結果等に基づき、学校関係者評価を実施し、次年度に向けた方針を作成いたしましたので、ここにお知らせします。今後とも大泉学園緑小学校の教育活動へのご理解とご協力をお願いします。

### 1 自己評価結果

#### (1) 確かな学力の定着と向上

「授業規律、学習習慣、基礎的・基本的な内容の定着」は、3.4(85%相当)の肯定的評価となりました。授業のめあての明確化、ICT機器等を活用した視覚的な分かりやすさ、振り返りの時間の確保等の工夫によって、「授業が分かりやすい」と感じる児童は、3.8(94%相当)となりました。一方で、家庭学習の習慣化は、児童67%、保護者73%となりました。家庭で繰り返し学習を主体的に進められる課題を提供したり、個に応じて内容を選択できたりという工夫を進めていきたい。

「思考力・判断力・表現力、自ら学ぶ意欲や主体的な学び方、情報活用能力」の肯定的評価は、3.4(85%相当)となりました。「考える場、体験活動、問題解決学習」等、主体的に学ぶ機会を提供しているところですが、「すすんで自分の考えを発表し、話し合うことができた」という児童は、69%と少なく、発表というハードルは下がっていません。自分の考えを創り、書き、伝えるという一連の楽しさや大切さを実感させる工夫を重ねていきます。

読書活動の推進については、3.1(77.5%相当)となりました。朝読書、読書旬間、家庭読書等の機会を設けてきましたが、「すすんで本を読む」という児童64%、「学校が読書習慣づくりを進めている」感じる保護者66%でした。読書活動の奨励を続け、さらに本に親しめる活動や環境を工夫し、読書活動の推進を図っていきます。

#### (2) 豊かな心の育成

「思いやりの心の育成」については3.6(90%相当)の肯定的評価となりました。「学校が楽しい」ということに否定的な回答している児童、保護者とも、10%強、存在している。楽しいという要素は、集団活動面、対人関係面、学習関係面での各人の感受性等によって違うと考えられるが、少しでも困り感を減らし、学校は楽しいと感じさせたい。

「生活指導・教育相談の充実」は、3.4(85%相当)の肯定的評価となりました。規範意識に関する肯定的評価は児童94%、保護者89%と高い。しかし、悩み等を相談することに関する肯定的評価は学校99%、児童65%、保護者78%と学校・保護者・児童との間に大きな差が生まれている。スクールカウンセラーや心のふれあい相談員にも相談できる体制を継続し、安心して相談ができるよう工夫、啓発、実施に努めていく。

「キャリア教育の充実」は、3.4(85%相当)の肯定的評価となりました。年間を通してキャリアパスポートの作成、活用を通して、目標の設定と振り返りを実施していることで、行事等による自分の成長に関する肯定的評価は、児童89%、保護者93%と高くなっています。ただ、「自分によいところがある」と感じる児童は72%でした。自分が行っている活動がどのように良かったのか具体的な声掛けや評価をし、価値付けることで自己肯定感を高めていきます。

また、小中一貫教育推進の有用性を肯定的に捉えている保護者は58%でした。引き続き、講話、便り、ホームページ等、様々な媒体によって取組や成果を公開していきます。

#### (3) 健康の保持増進・体力の向上

「体力向上の取組の充実」は3.1(77.5%相当)の肯定的評価でした。継続して体力向上の取組を進めます。

「基本的習慣の確立」は、3.3(83%相当)の肯定的評価でした。「取組が計画的」という教員91%、「早寝早起きや朝ごはんを実践」という児童79%、「身に付くよう指導している」とした保護者80%と、学校と児童・保護者との評価の開きが10%以上ありました。生活リズムチェックシート等を活用し、児童の生活習慣などを把握するとともに、生活習慣の確立の大切さを伝えていきます。

「安全教育の充実」については、3.6(90%相当)の肯定的評価でした。引き続き、安全教育、情報モラル教育の計画的実施とともに一声指導等を取り入れ、安全意識や情報に関する規範を高めていきます。

(4) 学校・家庭・地域の協力・連携

「学校・地域の人々・自然と関わる活動の充実」については、3.5(87.5%相当)の肯定的評価でした。今後も、これまでのゲストティーチャーとの関わりを引き継ぎつつ、地域の人材を活用した活動の充実を図っていきます。

「教育活動の発信」については、3.2(80%相当)の肯定的評価でした。「十分に公開している」と回答した保護者84%となり、昨年度より4%下回りましたが、引き続き、授業公開をしたり、メール、ホームページ等を活用したりしながら、発信に努めていきます。

2 自己評価結果

項目	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価項目	評価	自己評価結果	自己評価を踏まえた次年度の改善策
確かな学力の定着と向上	学習指導と読書指導・学校図書館の充実を通して、確かな学力を育成する。	学習指導の充実による授業規律、学習習慣、基礎的・基本的な内容の定着	・実態に合わせたスタンダードに基づく授業規律(姿勢、話す聞く態度、発言の仕方、正しい言葉遣い)、家庭での学習習慣(学年×10分)、学習スタイルの定着。 ・デジタル教科書、MEXCBT、東京ベータシールドリル等を活用した繰り返し学習の充実。 ・全授業80%以上の授業のユニバーサルデザイン化(「めあて、流れ、まとめ」の表示、振り返りの時間の確保、バランスの良い個別最適な学びと協働的な学び) ・積極的なICT機器活用(視覚化)、動作化、作業化の取り入れ(全授業80%)	●教員意識「学習規律の定着指導」 ●教員、児童、保護者意識「家庭学習の定着」 ●教員意識「繰り返し指導」 「授業のUD化」 「ICT活用」 ●児童・保護者意識「分かる」「少人数分がやすい」 ●単元テスト通過率 ●全国調査平均値差	3.4	・授業スタンダードを基に、学習規律が定着するよう指導にあたっていると感じている教員は、95%である。 ・読み書き計算の課題をバランスよく出し、授業の予習復習ができるようにしたり、学年×10分の家庭学習を推進していることを保護者会等で伝え、丸付けをお願いしてたりしてきたが、学校以外での学習時間学年×10分に対してできていると回答した児童67%、保護者73%であった。 ・スライド資料等を有効に活用しながら授業のめあてからまとめ、振り返りの授業の流れを理解し、授業規律や基礎的・基本的な知識・技能の定着をすることができた。 ・児童の94%が授業が分かるようになったと回答し、保護者の84%が分かる授業をめざし、工夫していると回答している。 ・目標通過率(80%)を通過している児童は国語70%、算数65%であった。 ・学力調査では、全国平均を国語0.2下回り、算数は2.5上回った。	○時代や児童の実態に合わせながら、スタンダードを見直しつつ、学習規律の定着と個別最適な学びや協働的な学びを推進する学習展開の等のスタンダード化を図っていく。 ○ICT教材の利用を視野に入れ、児童がすすんで家庭学習に取り組めるように促す。宿題については同量同質を求めるのではなく、家庭学習と併用する形として学習習慣を付けるツールとして扱う。 ○知識・技術の定着においては、繰り返し学習することによることも大きい。ICT機器を活用しての繰り返し学習を含めながら継続を図る。 ○習熟度別学習については、教員の指導方法の違いに影響される場合もあるので、コースによって指導方法の差が埋まるよう学習スタンダードの学習展開を基本に担当者間で児童の学習状況についての情報交換しながら連携を取る。
		学習指導の充実による思考力・判断力・表現力、自ら学ぶ意欲や主体的な学び方、情報活用能力の育成	・「体験的な活動」、「問題解決学習」、「考える場」、「意見を交換する場」の設定(全授業の70%) ・文房具・思考ツールとしてのICT機器活用(毎日の利活用) ・情報教育全体計画に基づくICT活用とプログラミング教育の実施(10時間程度) ・持続可能な開発目標(SDGs)と関連付けた教育活動の取組 ・外国語における話す・聞く・読む・書くの基礎的スキル習得。 ・アスリート等を活用した学校レガシー教育や体験等の実施 ・校内研究の計画的な実施と充実	●教員「主体的、対話的で深い学びに向けた授業改善」意識 ●児童意識「考えを発表し、話し合う」 「めあて達成への努力」 ●保護者意識「自ら考え判断して課題を解決する」	3.4	・校内研究の取組とも連動させ、ICTを活用することで話し合いや発表の機会を確保し、個別最適、協働的な学びの充実を図ってきた。話し合いの場の確保に関する教員の意識は90%以上であり、児童も対話や交流活動に動いたが、「発表」という言葉のハードルは未だ下がっていない。 ・すすんで自分の自分の考えを発表し、話し合うことができると回答した児童は、67%であった。 ・保護者は、児童が自ら考えて判断し、課題を解決している教育活動ができていると捉えている保護者は73%であった。	○校内研究の取組と連動し、ICT機器を積極的に活用することで個別最適、協働的な学びの更なる充実を図っていく。 ○ノートやワークシートなどに自分の考えを書くことができている児童が多いので、ICT機器を活用し、一覧表示をすること等で交流や対話の機会を増やし、発表のみならず、伝え合うこと楽しさや大切さを実感させる。 ○知識・理解を深めるだけでなく、自分の興味をもったものを調べたり、課題について友達と協力して解決したりする活動を計画的に位置付け、実施する。
		読書指導・学校図書館の充実による本をすすんで読む子の育成	・授業における学校図書館管理員や学校図書館の積極的活用 ・朝読書、読み聞かせ、親子読書、読書量の目標等の設定 ・おすすめの本を紹介し合う、読書の感想を交流し合う場の設定 ・寄贈本の受け入れ等を中心とした蔵書充実 ・持ち運びラック等の導入による学級文庫の充実	●教員「具体的方策」の実施率 ●児童・保護者意識「読書の定着」	3.1	・教員は、「学校図書館等の活用」96%、「読書指導の推進」84%と、朝読書、読書時間、親子読書の機会を活用し、読書の充実を図ってきた。 ・「すすんで本を読んでいる」という児童64%、「学校が読書の習慣づくりに努めている」と捉えている保護者66%と、児童の肯定感は昨年度ほぼ変わっていない。	○引き続き、朝読書や読書時間を設定し、読書活動を重視して教育活動を展開する。 ・各学級での児童同士の読み聞かせの推奨 ・家庭読書など家庭との連携した読書活動の推進 ・音読を「読書」に位置付け、低学年→10分、中学年→15分、高学年→20分の読書活動を推奨 ○学級文庫の活用、家庭からの持参等、より多くの本に触れさせる環境をつくる。
豊かな心の育成	高め人権教育・道徳教育の推進を通して、豊かな心を育てる。学校づくりと生活指導・特別支援教育の充実、自尊感情、自己肯定感を	互いを尊重する人権教育・道徳教育の推進によるいじめを許さない学校づくりの心の育成	・いじめや人権に関する特設授業の実施(年3回) ・SOSの出し方教育の実施(年1回) ・いじめアンケート調査等による防止と早期発見の取組の実施。 ・いじめ一掃プロジェクトへの参加。 ・道徳性に係る成長の様子の継続的把握 ・年間指導計画に基づく道徳科授業、人権教育の実施。 ・価値について自分事として考える道徳、価値について多面的・多角的に議論する道徳への改善と道徳授業地区公開講座の実施。	●教員「具体的方策」の実施率 ●児童・保護者意識「学校が楽しい」「思いやりがある」 ●いじめ認知件数の昨年度比較	3.6	・「学校が楽しい」と回答している児童88%、「落ち着いた楽しい学校」と回答している保護者85% 「他人に優しく接している」と回答している児童93%、「豊かな人間関係を育む教育活動が行われている」と回答している保護者86%であった。 ・いじめアンケートで回答された内容は全ていじめとして認知し、早期対応に心掛けている。同一案件も含まれるが、申告数を総和すると107件となり、全体の22%であった。アンケートを基に児童に丁寧な聞き取りと指導を進めており、現在、経過観察している案件は25件である。	○学校いじめ防止基本方針に則り、継続していじめ防止対策に取り組む。 ○各学級において学級の良さや大切にしたいことなどを価値付ける一言指導を積み重ねる。 ○いじめアンケートで回答された内容を認知することを継続するとともに、報告や指導の記録を作成し、早期対応後(事後)の指導に役立てる。また、記録を生かし、解決後も引き続きの指導や経過観察等の必要な対応を丁寧に実施する。 ○引き続き、教員からの児童の呼称を「～さん」に統一する。 ○校内における教員に対する人権教育研修、いじめ対応研修の継続を図る。
		生活指導・教育相談活動・特別支援教育の充実による規範意識の向上	・スタンダードに基づく指導による規範意識の向上 ・規範意識を高めることをねらいとした授業の実施(年1回以上) ・SOSの出し方教育の実施(年1回以上) ・情報交換及び、児童への働きかけ等の対応協議を目的とした校内委員会等の定期的・継続的開催。 ・地域、外部機関、スクールカウンセラー、心のふれあい相談員等の活用・連携。	●教員「規範意識の向上指導」 「組織的な生活指導推進」の実施率 ●児童・保護者意識「きまりを守る」「相談体制の充実」	3.4	・教員アンケートでは、「スタンダードによる指導」95%、「規範意識を高める授業の実施」でも93%の達成率であった。「きまりを守って生活している」との回答は、児童94%、保護者89%であった。 ・考えの多様化により、スタンダードに記載のない学習用品、健康用品の持ち込みが増えている。 ・「組織的な生活指導の推進している」と捉えている教員99%に対し、「相談できている」児童65%、「相談の機会が充実している」と捉えている保護者78%と、学校・保護者と児童の満足度に大きな差が見られる。 ・様々な原因があるが、30日以上の事故欠席は新たに7名追加された。	○原則、学校や学習に関わりがないものは持つてこないことをスタンダードとする。ただし、リップクリームやハンドクリームなど健康などに関わるものは、多様性を尊重しつつ、保護者に連絡帳を書いてもらう等、個に応じた対応を進める。 ○発達段階に応じて規範意識を高める授業を実施したりすることを継続する。 ○スクールカウンセラーや心のふれあい相談員に相談できる体制づくりの継続を図る。 ・担当者や活動内容の周知 ・周知におけるオンラインや放送等の活用 ・相談員等の空き状況の表示による利用推進 ・3年、5年の全員面談の継続 ・校内委員会への柔軟な参加
		キャリア教育の充実による充実感や自尊感情・自己肯定感の高揚	・キャリアパスポートの活用した学校生活における目標の明確化と振り返り(年5回程度) ・教科・領域における異学年交流の実施 ・集団活動を通した各自の役割の意識化と役割を価値付ける一声指導の充実 ・保護者をゲストティーチャーとした職業体験授業の実施 ・大泉学園中学校、近隣幼稚園、保育園との交流活動の実施	●教員「具体的方策」の実施率 児童意識「役に立っている」 「よいところがある」 ●保護者意識「意欲的に取り組む」「小中一貫教育の推進貢献度」	3.4	・キャリアパスポートを年5回以上活用し、目標の明確化と振り返りを行うことができたと感じている教員は96%と高い。一方で自分によいところがあると捉えている児童は73%と少なかった。 ・「係活動や委員会活動に責任をもって取り組めた」という児童89%、「学校は行事で成長を促している」と捉えている保護者93%という回答であり、特別活動や学校行事での成長の期待の高さがうかがわれる。 ・校区別協議会の記事を学校だよりに掲載、対外的に周知を図ることで教員の達成感は89%であったが、小中一貫教育推進の有用性を肯定的に捉えている保護者の回答は58%であり、26%が分からないと回答している。	○キャリアパスポートによる指導に継続して取り組む。 ○学級活動(係活動・当番活動・お楽しみ会など)、学校行事、委員会活動、授業等において、児童の活躍の場を増やし、活動後の振り返りの場を増やし、教員や友達と交流することを通して、自己肯定感を高めるための価値付けを行う。 ○小中一貫教育の実践に関する取組について学校だよりやホームページ記事への掲載を継続し、対外的な周知を図る。 ○幼保小中の連携については、当該学年だけでなく、全学年の児童に活動について担任から説明をしたり、全校朝会での講話や当該学年からの紹介をしたりと児童に印象付ける発信を試みる。

健康の保持増進・体力の向上	体力向上を図る取組の充実による意欲的に運動に取り組む態度の育成	・体育科指導の工夫(運動量が確保できる授業展開) ・日常的な体育的活動の推奨(外遊び、なわとび旬間、持久走旬間) ・新体力テスト結果に基づく課題改善に向けた授業等の実施(授業改善プランへの反映)	●教員「具体的方策」の実施率 ●児童・保護者意識「体力を高める努力」 ●体力調査結果平均値差	3.1	・大なわ集を増やす等、「取組を計画的に実施した」教員93%、「すすんで運動し、体力を高める努力をしている」児童85%、保護者83%であった。 ・体力調査総合得点は、全国平均値に対して96%にまで上昇した。個別の種目においても、全国平均値を上回っているものは、各学年各男女で96種目中31種目(32%)であった。	○外遊びの推奨、持久走旬間、なわとび旬間に継続して取り組み、日常的に運動する機会を確保する。 ○体力調査の結果を基に本校児童に足りない力を高める補助運動等を体育の授業における準備運動等に位置付け、継続して取り組む。
	健康教育・食育の充実による心と体の健康への関心の高揚と実践力の育成	・「早寝・早起き・朝ごはん」、「あいさつ」の推奨(学校・保健・給食だより等)と、生活アンケートによる振り返り。 ・薬物乱用防止教室、学校保健委員会の充実。 ・指導計画に基づく食に関する授業や体験的な活動の実施。	●教員「具体的方策」の実施率 ●児童・保護者意識「早寝早起き朝ごはん」「すすんであいさつ」	3.3	・健康教育・食育について「取組が計画的に実施されている」という教員の回答は91%、保護者の回答は80%であった。また、「早寝早起きや朝ごはん」を実践していると回答した児童は79%と教員・保護者より10%以上開きがある。 ・あいさつについては、「できている」と回答した児童が87%、「学校があいさつや返事をする等の基本的な生活習慣が身に付くよう指導している」と回答した保護者が81%であった。児童の肯定的評価は昨年度より、4%高くなっている。	○保健委員会からの周知等、児童の主体的な活動として早寝早起き、朝ご飯の大切さを周知していく。 ○長期休みの最後の5日間における生活リズムチェックシートによる健康管理を継続していく。 ○始業前のあいさつ隊活動を継続していく。 ○諸通信、諸掲示、学校保健委員会の継続的開催により、健康教育について家庭への啓発を図る。
	安全指導の充実による危険を回避しようとする力の育成	・現実に即した避難訓練、Jアラート対応指導、交通安全教室、セーフティ教室の実施。 ・安全指導日の一斉指導、各教科及び領域に関連させた安全学習の実施 ・「防災ノート～災害と安全～」の活用【年2回以上】 ・安全点検等による環境改善(施設・遊具)の充実(毎月) ・情報モラル教育(学習用タブレットの適正な利用を含む)の実施及びSNS家庭ルール作成・遵守への啓発	●教員「具体的方策」の実施率 ●児童・保護者意識「身を守る力」 ●校内事故発生比率(前年度比)	3.6	・安全教育の「取組を計画的に実施した」という教員の回答は92%、「危険なことから身を守る力が付いている」という児童の回答は児童91%、保護者88%であり、教員・保護者より児童の肯定的評価が10%程度低い。 ・けがによる保健室利用は143件であった。 ・情報モラル教育の「取組を計画的に実施した」という教員の回答は84%であった。2年から6年について情報モラル教室を実施した。	○引き続き、現実に即した避難訓練を実施するとともに教職員への研修機会を設ける。 ○教科においても、地域ハザードマップ等の活用の推進を図る。また、計画に基いた夏休みなどの長期休業中の防災ノートの活用、一声指導の実施等、計画的な取組を推進する。 ○東京SNSノート、学校SNSルール、情報モラル教室等も活用し、タブレット端末との上手に付き合う方法等、情報に関する規範を高める指導を継続する。
学校・家庭・地域の協力・連携	学校・地域の人々・自然と関わる活動の充実を通じた愛校心、郷土愛等、社会貢献に資する意欲と態度の育成	・学校支援コーディネーターとも連携した各学年における保護者、地域人材、学校外部団体の積極的活用(学習指導、学校行事等) ・地域社会へのボランティア活動の開発と参加協力 ・複数学年での地域未来塾の実施と充実 ・地域行事への参加・協力	●教員「具体的方策」の実施率 ●児童意識「地域の役に立ちたい」 ●保護者意識「自然・地域との関わりを大切にしたい教育」	3.5	・「計画的に実施した」という教員の回答は88%であった。「地域の役に立ちたい」と回答した児童は92%、「自然・地域との関わりを大切にしたい教育が行われている」と回答した保護者は84%であった。 ・おやじの会による職業体験授業、農家によるたくわん漬、地域に住む師範等による伝統文化体験など、ゲストティーチャーによる授業等、外部講師や地域人材活用を進めてきた。	○これまでのゲストティーチャーとの関わりを引き継ぎつつ、自然や地域の方々と関わる活動、キャリア教育に関わる活動、学校支援コーディネーターと連携した地域人材を活用した活動に取り組む。 ○たくわん漬体験を継続し、農家と連携した学習活動の充実を図る。
	学校からの積極的な教育活動の発信と適正な学校評価を通じた学校教育への理解の深化	・学校公開による教育活動の発信 ・学校・学年・学級だより、ホームページ、メールシステム等による学校生活の様子等の情報発信と啓発 ・ICT機器を活用した家庭との連絡の普及と確立。 ・学校の教育活動の評価アンケート及び、学校評議委員会(年3回)の実施 ・学校経営計画、学校評価の公開	●活動発信回数 ●保護者意識「様子が分かる」	3.2	・ほぼ毎日、ホームページで活動の様子を発信し、1月29日現在209回の発信である。給食記事も毎日154回の発信をした。 ・「教育活動を十分に公開している」という保護者の回答は84%であった。昨年度より4%数値が下がっている。	○引き続き、授業や行事の公開やメール、ホームページ掲載等の通信手段を積極的に活用し、迅速かつ有効に情報が発信できるよう努める。

### 3 学校関係者評価の概要

1月30日(火)、学校評議員会を開催し、学校関係者評価を行い、各短期経営目標に対する具体的方策等の教育活動及び自己評価に対して、「概ね適正である」と肯定的な評価を得ました。

また、各項目に関して、以下のようなご意見が出されました。

#### ① 学力の定着と向上 (◎成果 ●課題)

- ◎ 授業に集中している。 ◎ 支援をしつつ進められていた。 ◎ 日常的にタブレットを活用していた。
- 学力差は大きさを感ずる。 ● 主体性や対話する力の育成。 ● 自分の言葉で話す場の設定。
- 読書好きな児童の育成。

#### ② 豊かな心の育成 (◎成果 ●課題)

- ◎ 先生、児童が明るく過ごせている。 ◎ 運動会が実施できた。
- 自分から環境に慣れていく力の育成。 ● 不登校児童に対するフォロー体制の充実。
- ICT活用と集団生活のバランス

#### ③ 健康の保持増進・体力の向上 (◎成果 ●課題)

- ◎ 楽しく体力が高める工夫。 ◎ 工夫した掲示物。 ● 挨拶の仕方。

#### ④ 学校・家庭・地域の協力・連携 (◎成果 ●課題)

- ついた餅を食べる食育への要望。 ● 学校評価のフォーマットの改善 ● 働き方改革推進の要望

これらの成果と課題を受け、学校としては以下のように方針をまとめました。

#### ① 学力の定着と向上

- 授業のユニバーサルデザイン化(めあての明確化、視覚化、見えないものの見える化等)の推進。
- タブレット端末を活用することで自分の考えを発言・発表したり、興味・関心のあることを追究したりする授業の計画的な設定。
- 読書旬間、読み聞かせ、音読発表会、読書目標の設定、家庭読書等の取組の継続。

#### ② 豊かな心の育成

- 学校いじめ防止基本方針に則り、いじめの防止・早期発見・早期解決への組織的な取組。
- 大泉学園緑小スタンダード(生活編)を見直しと社会規範を守る意識を高める教育。
- 将来への展望や見通しをもたせるキャリア・パスポートの活用の継続。
- 小中一貫教育取組プログラムに基づいた取組の対外的周知。

#### ③ 健康の保持増進・体力の向上

- 新体力テストの結果を活用による体育授業の改善。運動に親しめる児童の育成。
- 健康教育、食育の指導を計画的な実施と充実。
- 避難訓練、交通安全教室、セーフティ教室、情報モラル教室等、安全教育に関わる取組の計画的な実施。

#### ④ 学校・家庭・地域の協力・連携

- たくわん漬、もちつき、職業体験授業、伝統文化体験授業等の地域貢献意識を高める教育の継続化。
- 年4回の学校公開の実施。連絡アプリ(Sigfy)を活用しての配布への切り替えと内容の充実。

#### 4 学校関係者評価結果

項目	具体的項目	学校関係者評価	学校関係者評価を踏まえた次年度の方策・基本方針
確かな学力の育成	学習規律の定着 家庭学習の定着 基礎的・基本的な知識・技能の定着	◎授業中に参観があっても振り向きが少なく、授業に集中している様子が見られた。 ◎算数の授業やテストを受けている様子から、学習内容に漏れがないよう、個々に支援をしつつ授業が進められていると感じた。指導人数等を増やし、手厚く教えていくことで、成果が出ると考えられる。 ●タブレットを活用している場面等、姿勢がよいとは言えない。ストレートネック等の症状が出ないよう気を付けた活用をしてほしい。 ●地域未来塾等でも学力差は大きくなってきているように感じる。学習に向かわないからできない、できないから学習に向かわない、そして、できないまま進級していくというサイクルに陥っているのではないだろうか。	●時代や児童の実態(多様性)に合わせた大泉学園緑小スタンダード(学習編)の見直し、共有化、実践化を継続し、授業規律や知識・理解、技能の定着をめざす。 ●家庭学習や地域未来塾での学習においては、ICT教材の利用も視野に入れながら、宿題以外の家庭学習の啓発を進めたり、個別最適な課題を家庭と連携して設定したりする等、学習習慣の定着に向けて取り組む。 ●授業のユニバーサルデザイン化(めあての明確化、視覚化、見えないもの見える化等)を推進し、児童が分かりやすいと思える授業に努める。 ●ICT教材等を計画的・効果的に活用した補充的な学習や繰り返し学習への取組を推進するとともに、評価についての研鑽を進める。 ●学力調査により明らかになっている課題に類似した問題を解答する等、MEXCBTを活用した学習経験を増やす。
	思考力・判断力・表現力、自ら学ぶ意欲や主体的な学び方、情報活用能力の育成	◎「一流の大学を出ても、社会人としては三流である」と言われている時代である。主体的、対話的なJ活動を取り入れ、思考・判断・表現力、コミュニケーション能力を高めようとするのは取組みはよい試みである。 ◎高学年の授業では、日常的にタブレットを児童が活用している様子が見られた。 ●よい大学に行くには、よい中学に行かないといけないと考える現実がある。一方、国際的にみると、話す力に乏しい現実もある。 ●視点を変えられない児童や興味をしめさない児童に目を向け、主体性や対話する力を育ててほしい。緊張して発表できないというのではなく、自主性を育みたい。 ●書く力も学力調査等をみると低い傾向にある。自分で考えて発表する経験、ディスカッションをする経験と、自分の言葉を発する経験の場を設定していくこと大切に感じる。 ●プログラミング教育についての評価値が低い。これからの子供たちの身に付ける力を育むため、計画的に実施してほしい。 ●ICT機器活用能力として、ブライントッチを習熟させていくべきではないだろうか。	●タブレット端末を活用することで自分の考えを発言・発表したり、興味・関心のあることを追究したりする授業を計画的に設定し、児童の主体的な学びや対話的な学びが促進されるよう授業改善を推進する。 ●これからの社会に必要な力を育てていけるよう情報活用能力、表現力・発表力、協働して課題を解決する力等を中心とした計画的な校内研究と日常的な教材研究・開発に努めていく。 ●重点に「障害者理解」、「日本人としての自覚と誇り」を据えた学校2020レガシーの構築に向けた取組みや持続可能な開発目標(SDGs)と関連付けた教育活動を通して、学び方や考え方を身に付けるための体験的・探究的な学習を積極的に取り入れる。 ●情報活用能力育成やプログラミング教育の指導計画を見直し、発達段階に応じた系統的な指導の実践化に努める。
	読書活動の推進	●本をたくさん借りたね等と、賞賛を重ねることで読書好きな児童を育てていってはどうだろうか。	●読書旬間、図書館管理員や地域ボランティアを活用した読み聞かせ、授業における音読発表会等、本に接する機会を与える。 ●家庭とも連携し、読書目標の設定、家庭読書等の取組を続ける。
豊かな心の育成	思いやりの心の育成	◎「学校が楽しい」に関する否定的な児童が10%以上だというのが、授業等を見ていると、先生と児童の関係性はよい状態であると感じる。 ◎先生と児童が明るく過ごせば、あまり気にすることもないのではないか。 ●自分から環境に慣れていく力をつけることが大人になって役に立つということを知ってほしいし、その力を付けてほしい。	●全体計画・年間指導計画を活用し、意図的・計画的な人権教育・道徳教育を推進する。道徳の時間においては、児童が自分事として捉えることができる道徳、議論する道徳への授業改善を推進する。 ●道徳授業地区公開講座を計画し、道徳教育への理解を深める取組を実施する。 ●学校いじめ防止基本方針に則り、いじめの防止・早期発見・早期解決への組織的な取組、校内研修、支援方法の検討会議等に継続して取り組む。 ●年3回の「ふれあい月間」に合わせた「いじめ防止の授業実践」といじめアンケートを継続し、いじめの早期発見、解決に努める。
	規範意識の向上 生活指導・教育相談の充実	●階段の右側通行を徹底させてほしい。 ●全国的に不登校が30万人いると聞いた。学校に行くのが当たり前時代のようになってきているので、不登校児童に対するフォロー体制を充実させてほしい。 ●コロナ禍で保育園をずっと休んでいた子供たちが学校生活や集団生活に息苦しさを感じている様子が見られる。親と離れられない児童もおり、それを親も仕方ないことだと感じているように見える。●低学年は、コロナ禍でずっと家にいた子供たちが多く、人間関係が上手に作れないようだ。また、集団で過ごすことが少なかったため、静かに座っていられない子や、教室からいなくなってしまう子供も増えてきていると聞く。より支援の充実を図ってほしい。	●児童の実態や多様性も考慮に入れながら、大泉学園緑小スタンダード(生活編)を見直しつつ、社会規範を守る意識を高める教育を進める。 ・体育着のスポンの名前は、個人情報保護のために外す。 ・ハンドクリーム等の医薬品や学校生活の支援としての必要なものは、連絡帳等で個別に相談をする。 ●道徳科、学級活動等を中心に規範意識を高める授業を計画し、授業として実践する。 ●児童に対する温かい見守りと、一人一人を大切にすることを不登校等予防の基本方針とする。組織的困っている児童に関わるよう教育相談体制の充実させ、別室対応等の居場所づくりを進める。また、スクールカウンセラーや心のふれあい相談員、必要に応じて練馬区スクールソーシャルワーカー、子ども家庭支援センターとも連携を図り、不登校対応児童や登校しづら児童の早期発見と解消に向けた取組を行う。
豊かな心の育成	キャリア教育の充実	◎運動会が実施され、子供たちの様子が見られてよかった。若手の先生たちも、澁滞と活動的であったのもよかった。 ●電子化で個別最適な取組ができる一方、集団生活の中でしか培われないものもある。両者のバランスを適切にとり、教育活動を充実させてほしい。 ●小中一貫教育の推進の観点では、中学校との合同行事の拡大や、「ひろば」に中学生が来室できるようになる等、交流の場が増えていくことではないか。	●運動会については、児童の体力の実態を考慮し午前中開催を継続するとともに、集団活動を通じた達成感や成就感が得られるような行事としていく。 ●自分の学びを中・長期的に振り返り、将来への展望や見通しをもたせるため、継続してキャリア・パスポートの活用を図る。 ●小中一貫教育においては、小中一貫教育取組プログラムに基づき、「目指すべき15歳の姿」の実現を図る取組を協議したり、実施したりしていることを対外的に周知する。 ●中学校訪問等、中学校と連携した交流活動の継続化を図るとともに、新たな交流活動の方法を探る。 ●近隣の幼稚園、保育園と連携した交流学習、保幼小架け橋プログラムの活動の導入を通して、楽しい学校生活を送れるよう配慮していく。
	体力向上の取組の充実	◎体育の授業を参観したが、ボールを投げて箱を倒す運動を行っていて、楽しく体力が高められるよう工夫されていると感じた。 ◎体力テストの数値を気にしているようだが、体力向上に向けて、解決しようとする事柄や目的が見えてくればよいのではないだろうか。 ●学力向上より体力テストの数値が上がるように取り組むことが大事なのではないだろうか。	●学力も体力もバランスよく育成することを基本とする。 ●新体力テストの結果を活用し、課題に類似した補助運動を取り入れたり、いろいろな動きが体験できるような活動の工夫をしたりすることで体育授業の改善を図り、運動に親しめる児童を育てる。 ●体育集会や持久走時間、なわとび時間等の活動を継続・拡大していくことで休み時間も含めて日常的に運動に親しませる機会を設ける。
健康の保持増進・体力の向上	基本的な生活習慣の確立	●感染症が流行していることもあるので、「子供たちが元気で集まる学校づくり」を重点にしている。 ●ハンカチ、ティッシュを当たり前のように携帯できるように指導してほしい。 ●その場にふさわしい挨拶の仕方が身に付くよう指導してほしい。	●教育目標「健康で明るい子ども」の育成や達成に向けて、学校保健計画、食に関する教育の計画等に基づき、健康教育、食育の指導を計画的に実施し、その充実を図る。 ●チェックシート等も活用しながら、「早寝、早起き、朝ごはん」、「ハンカチ、ティッシュの携帯」等の推奨と振り返りを通じた望ましい生活習慣の指導と家庭への周知を図る。 ●挨拶については、始業前のあいさつ隊活動を年間を通して実施できるよう計画し、児童主体の活動によって推進を図る。
	安全教育の充実 情報モラル教育の充実	◎廊下等に落ちている物もなく、工夫した掲示物もきれいに貼られていた。また、可愛い工芸の作品も並べられていて、掲示することでの教育に力を入れていることが分かる。	●避難訓練、交通安全教室、セーフティ教室、情報モラル教室等、安全教育に関わる取組を計画的に実施する。 ●被災時等の際は、引き渡し原則となっているため、地区班編成を廃止する。集団下校が必要と判断した場合は、色別コースにより集団を編成して下校する。 ●情報モラルについては、4年生以上、年1回の専門家による指導を次年度も継続するとともに、情報教育指導計画を見直し、インターネット上の情報発信や情報取り扱い等について、年間を通して繰り返し、学習する。
学校・家庭・地域連携の協	愛校心、郷土愛等、社会貢献力の育成	●餅つきは、衛生上の問題があり、保健所への届け等が必要となり、手間がかかる。しかし、昔からやってきたことであるし、子供たちも楽しみにしていることであるため、餅をついて食べるという食育を継続してほしい。	●地域の特色を生かし、農業従事者と連携した学習活動(たぐわん漬け)を実施する。また、これまでのゲストティーチャーとの関わりを引き継ぎつつ、もちつき、職業体験授業、学校支援コーディネーターと連携した伝統文化体験授業等、各学年に外部講師を招き、児童の地域貢献意識を高める教育の継続化を図る。
	学校教育への理解	●学校評価の文字が細かい。細かいところは見ても分からないので、簡略化できないものか。改善を図るところ、大きなところが分かればよいので、学校評価についてのお知らせは、なるべく見やすいフォーマットにした方が、保護者の関心がわくのではないか。 ●先生たちに余裕をもたせることで、子供たちへの接し方も変わると考えているので、働き方改革は、重要だと思う。	●学校評価については、設定した目標や具体的計画等に照らして、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価するという目的に沿うよう実施するとともに、資料としての見やすさを追求していく。 ●年間4回の学校公開等において、教育活動の公開を行うとともに、働き方改革を視野に入れ、学校からの配布物等を連絡アプリを活用してのデータ配布に切り替え、発信内容等の充実を図る。